

# 大都市圏に進学した地方圏出身者の Uターン意識の変容メカニズム に関する研究

2023年5月26日（金）

塩見一三男（Isao SHIOMI）

富山大学 地域連携推進機構 地域連携戦略室

shiomi@ctg.u-toyama.ac.jp

# 研究目的



# 研究目的

本研究は、南砺市から提案のあった「若者のふるさと回帰意識の変遷の検証と対策案の提案」を踏まえたものとなる。

南砺市の依頼内容を要約すると、「**地方から大都市に転出した若者の再転入が進まないことが人口減少の大きな要因であること**」との問題認識に対して、「小学校から高校卒業までの間に積極的に行われてきた“ふるさと教育”を通じて“ふるさと回帰意識”が醸成されてきたにもかかわらず、大都市圏の大学進学・就職の間に、何らかの要因から“ふるさと回帰意識”が変容（＝無くなっている）しているのではないか」との仮説が示されている。

すなわち、「次図の矢印①の意識変容を研究対象として、その要因分析を行うとともに、その解消に向けた政策提案が欲しい」というものである。本研究はこの仮説検証に向けた意識変容の構造解析を目的として行うものである。



# ふるさとと回帰意識

	高校卒業前 (地方圏居住)	現在 (大都市圏居住)
大都市圏進学者の ふるさと回帰意識	有り (いずれUターンしたい)  ②	有り (いずれUターンしたい)
	無し (東京圏で生活を続けたい)  ③	無し (東京圏で生活を続けたい)  ①

②

有り

(いずれUターンしたい)

有り

(いずれUターンしたい)

③

無し

(東京圏で生活を続けたい)

①

無し

(東京圏で生活を続けたい)

# 研究方法



# 研究方法

## ■ 調査対象グループ

- グループ① 高卒前・Uターン意識有り×現在・Uターン意識無し 【主な研究対象】  
グループ② 高卒前・Uターン意識有り×現在・Uターン意識有り  
グループ③ 高卒前・Uターン意識無し×現在・Uターン意識有り

## ■ 調査対象

地方出身者（※1）で、大都市（※2）の大学に進学し、卒業後も大都市で働いている20～30代の男女（未婚・既婚は問わない）。

※1 富山県，石川県，福井県，長野県，新潟県

※2 千葉県，埼玉県，東京都，神奈川県，愛知県，京都府，大阪府，  
兵庫県

## ■ 調査方法

インターネットリサーチ会社の会員モニターへのアンケート調査



# 研究方法

## ■ 調査項目・分析方法

回答者属性（性・年齢，家族構成，職業，出身地，現在の居住地など）  
高校卒業後の進路，Uターン意識（高校卒業前，現在）→**単純集計**

### 【グループ①】

現在の「Uターン意識」に対する高校卒業後から現在までの様々な出来事の影響度  
→**因子分析**

### 【グループ③】

現在の「Uターン意識」に対する高校卒業後から現在までの様々な出来事の影響度  
→**因子分析**

### 【グループ②】

現在も「Uターン意識」がありながらUターンを決断できないことの様々な要因  
今後Uターンを決断する様々な要因 など

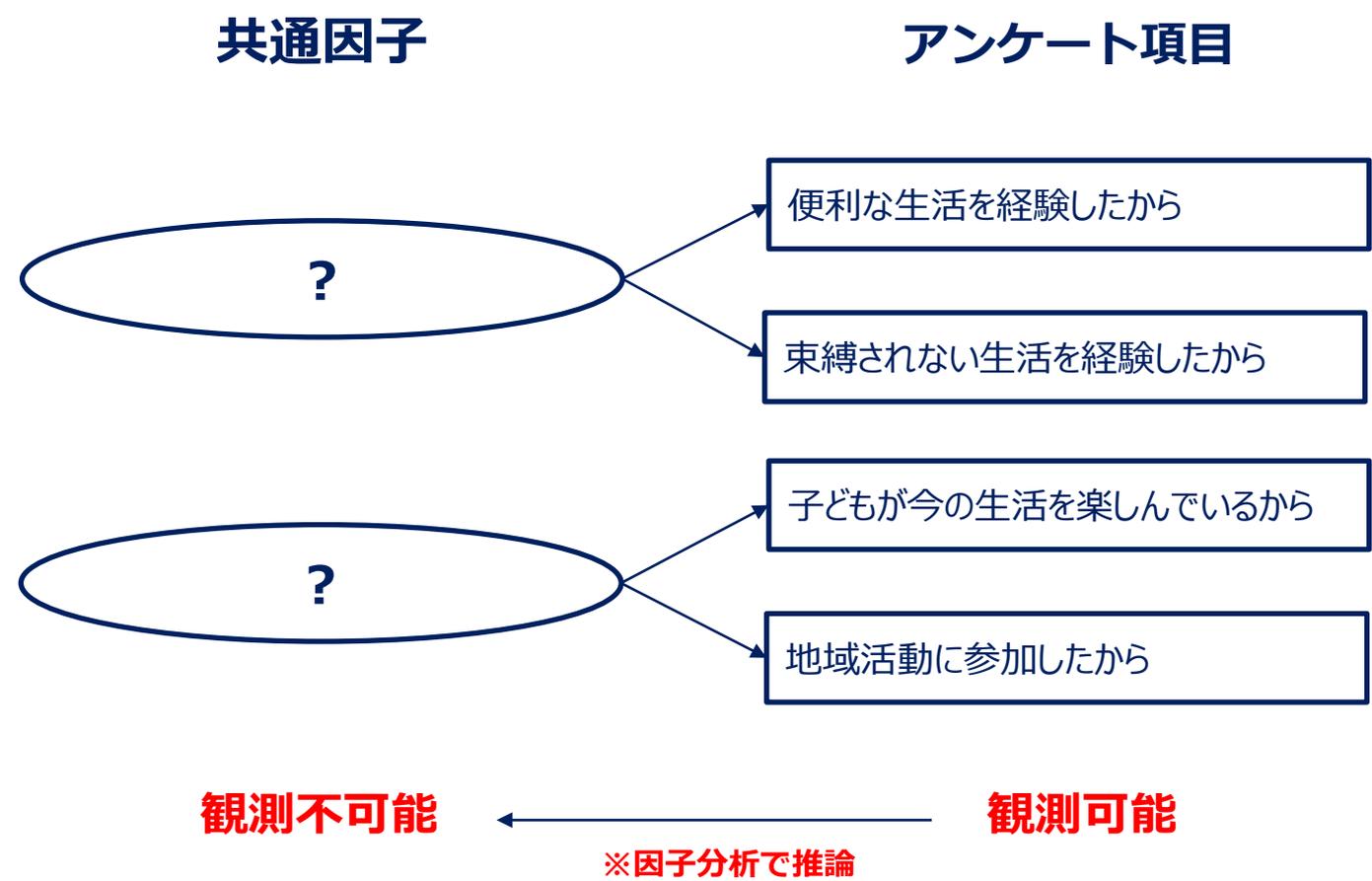
## ■ 回収数

グループ① 110サンプル    グループ② 108サンプル    グループ③ 110サンプル



# 因子分析とは

何故、ふるさと回帰意識が無くなったのか？

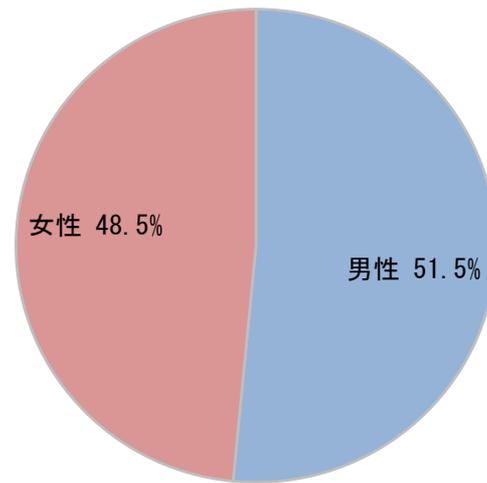


# 結果（単純集計）



# 性別

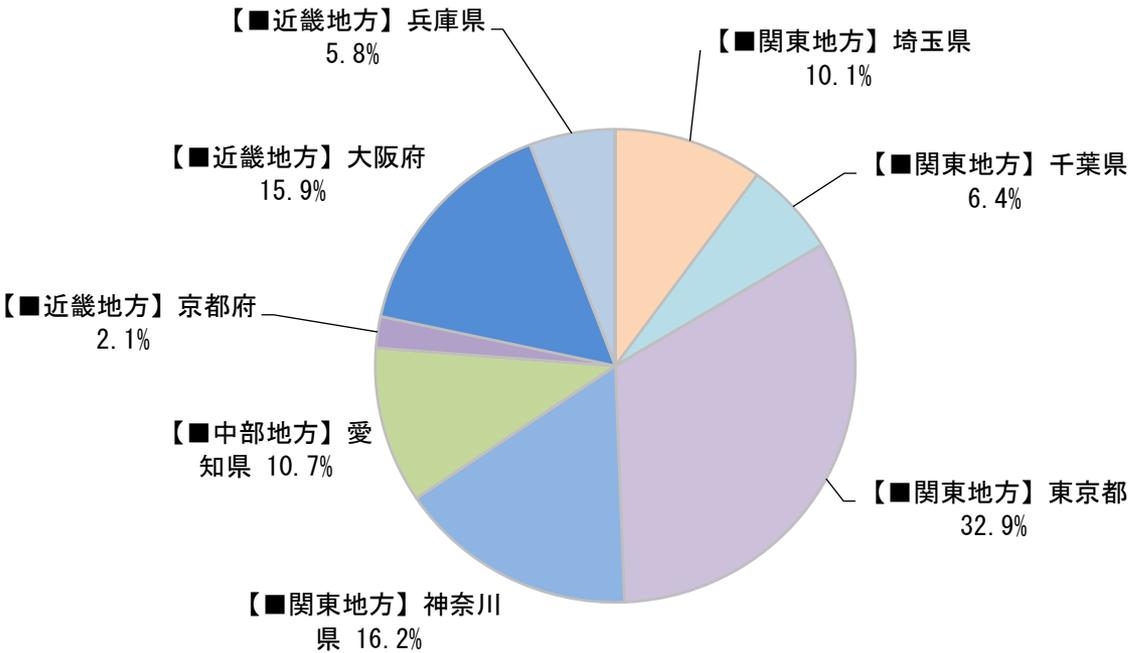
[F1] あなたの性別をお選びください。(1つだけ)  
(n=328)





# 現在の住まい

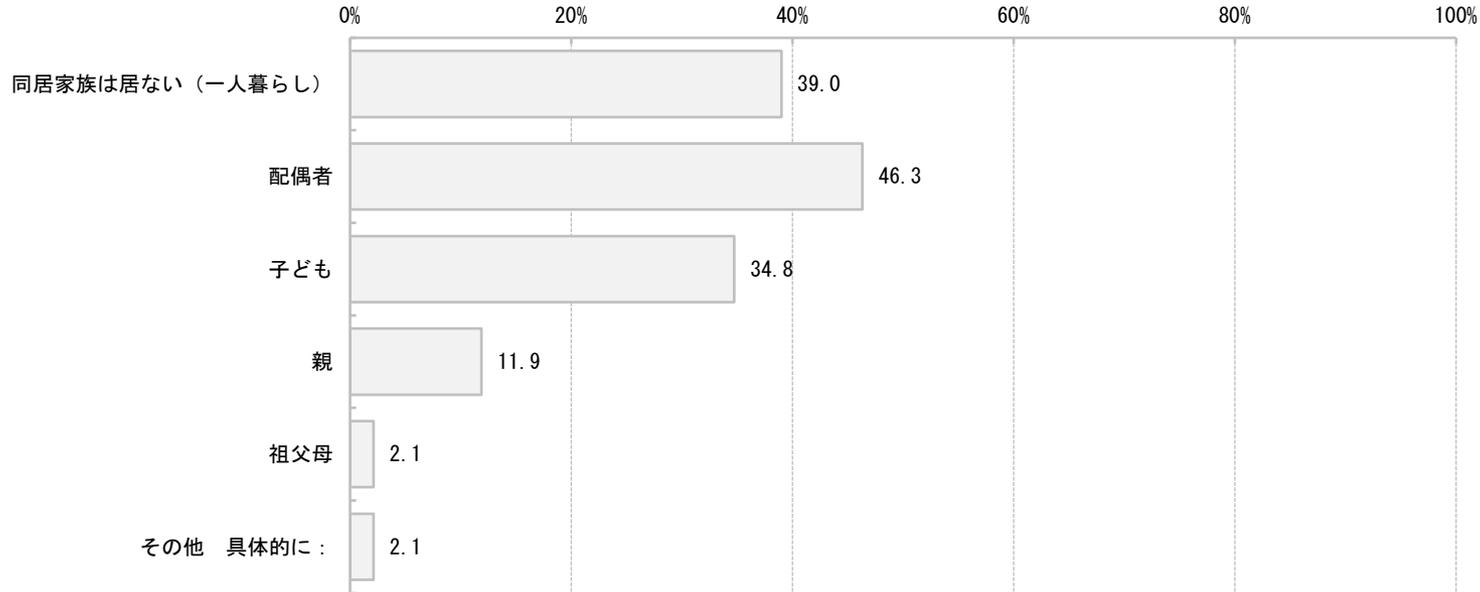
[F3] あなたのお住まいをお選びください。(1つだけ)  
(n=328)



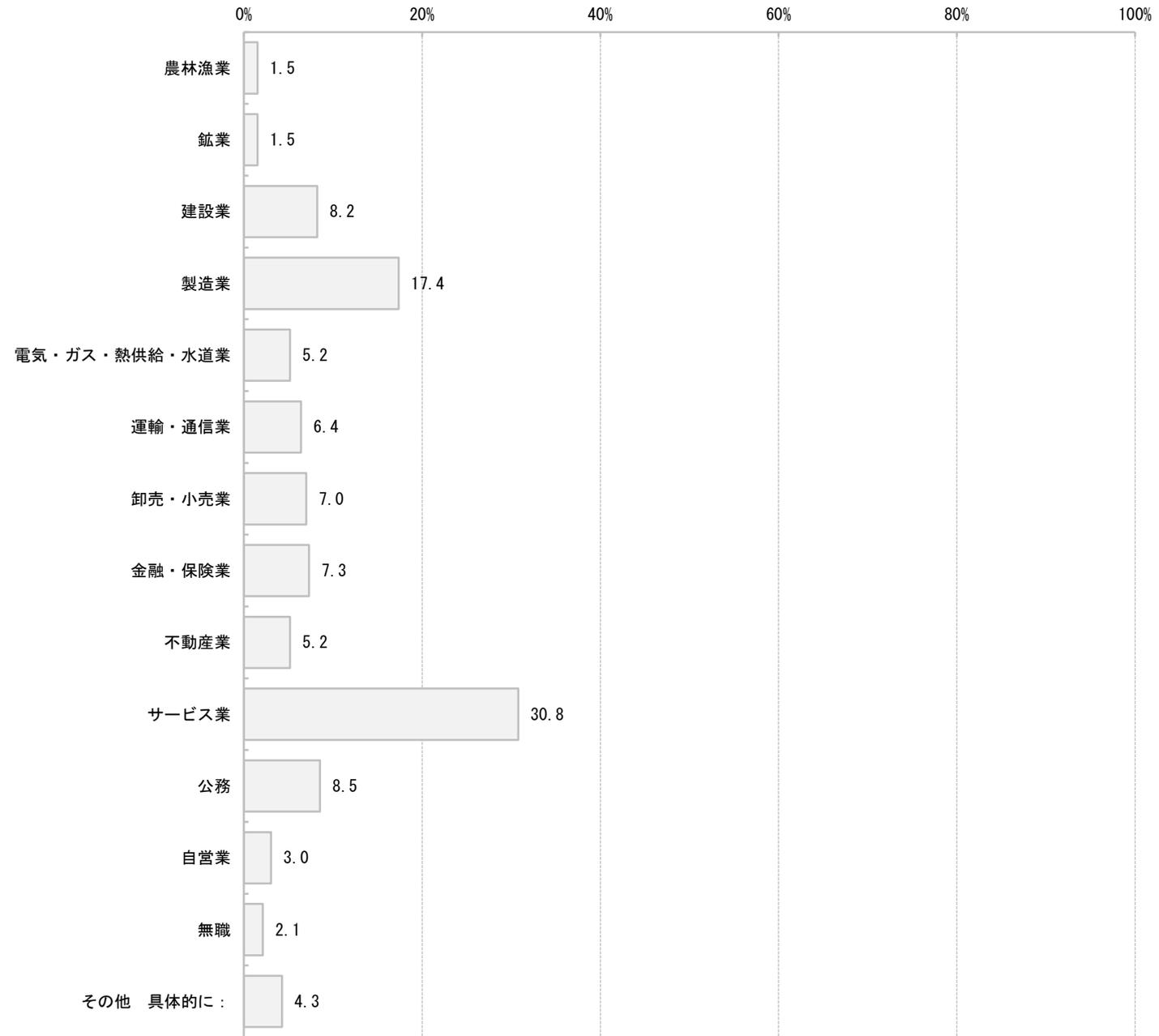


# 現在の同居家族

[Q1]現在の同居家族についてお答えください。  
(n=328)



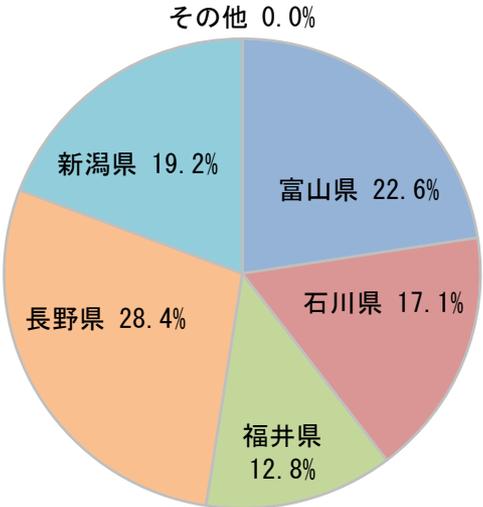
[Q2] 現在の職業についてお答えください。  
(n=328)





# 出身地

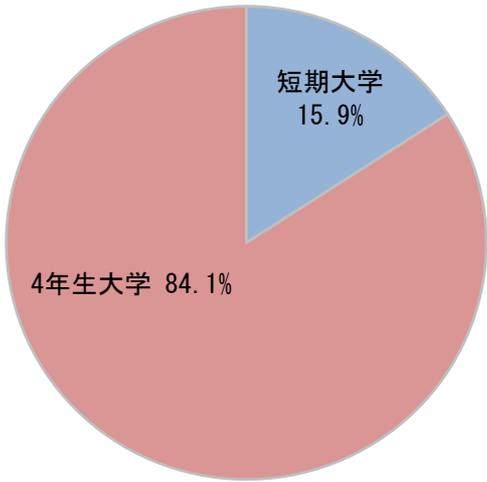
[SQ1] 出身地となる都道府県をお選びください。（注）引っ越し経験のある方は、出生から高校卒業までの間で、最も長く居住した都道府県を選定ください。  
(n=328)





# 高校卒業後の進路

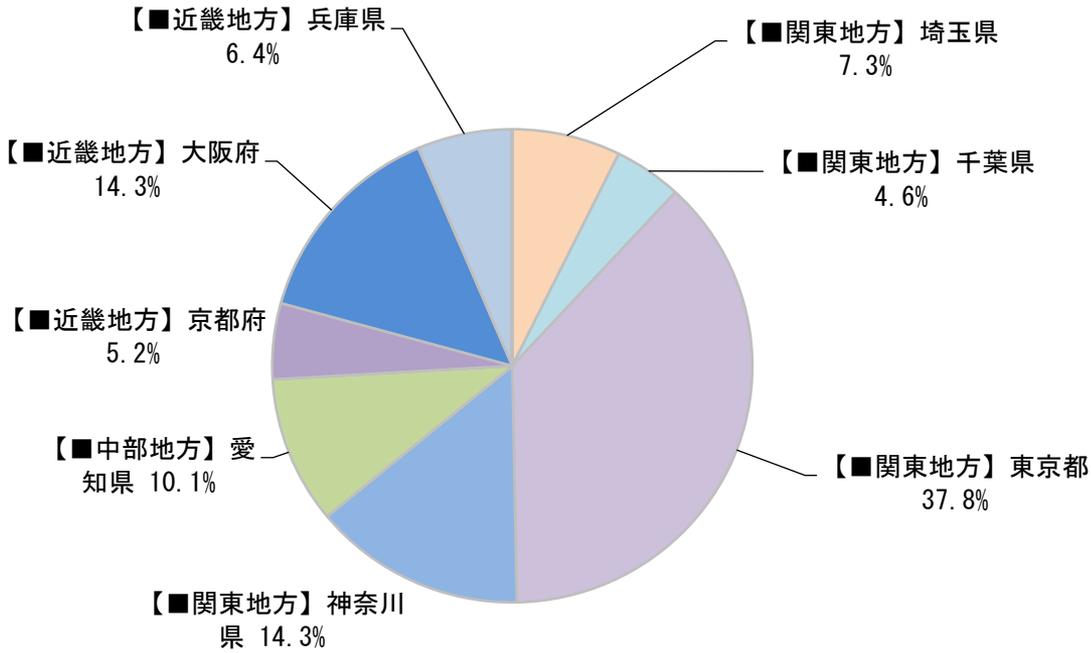
[SQ2] 高校卒業後の進路についてお選びください。  
(n=328)





# 高校卒業後の進路の所在地

[SQ3] 高校卒業後の進路の所在地についてお選びください。  
(n=328)

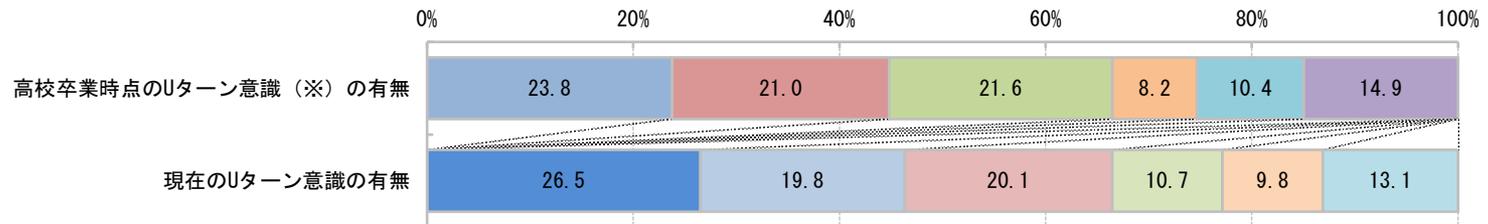




# Uターン意識

[SQ5]Uターン意識（※）の状況についてそれぞれお選びください。※いずれ出身県にUターンしたいという気持ち

- 強くUターン意識を持っていた
- まあUターン意識を持っていた
- どちらかというUターン意識を持っていた
- どちらかというUターン意識を持っていない
- あまりUターン意識を持っていなかった
- まったくUターン意識を持っていなかった
- 強くUターン意識を持っている
- まあUターン意識を持っている
- どちらかというUターン意識を持っている
- どちらかというUターン意識を持っていない
- あまりUターン意識を持っていない
- まったくUターン意識を持っていない



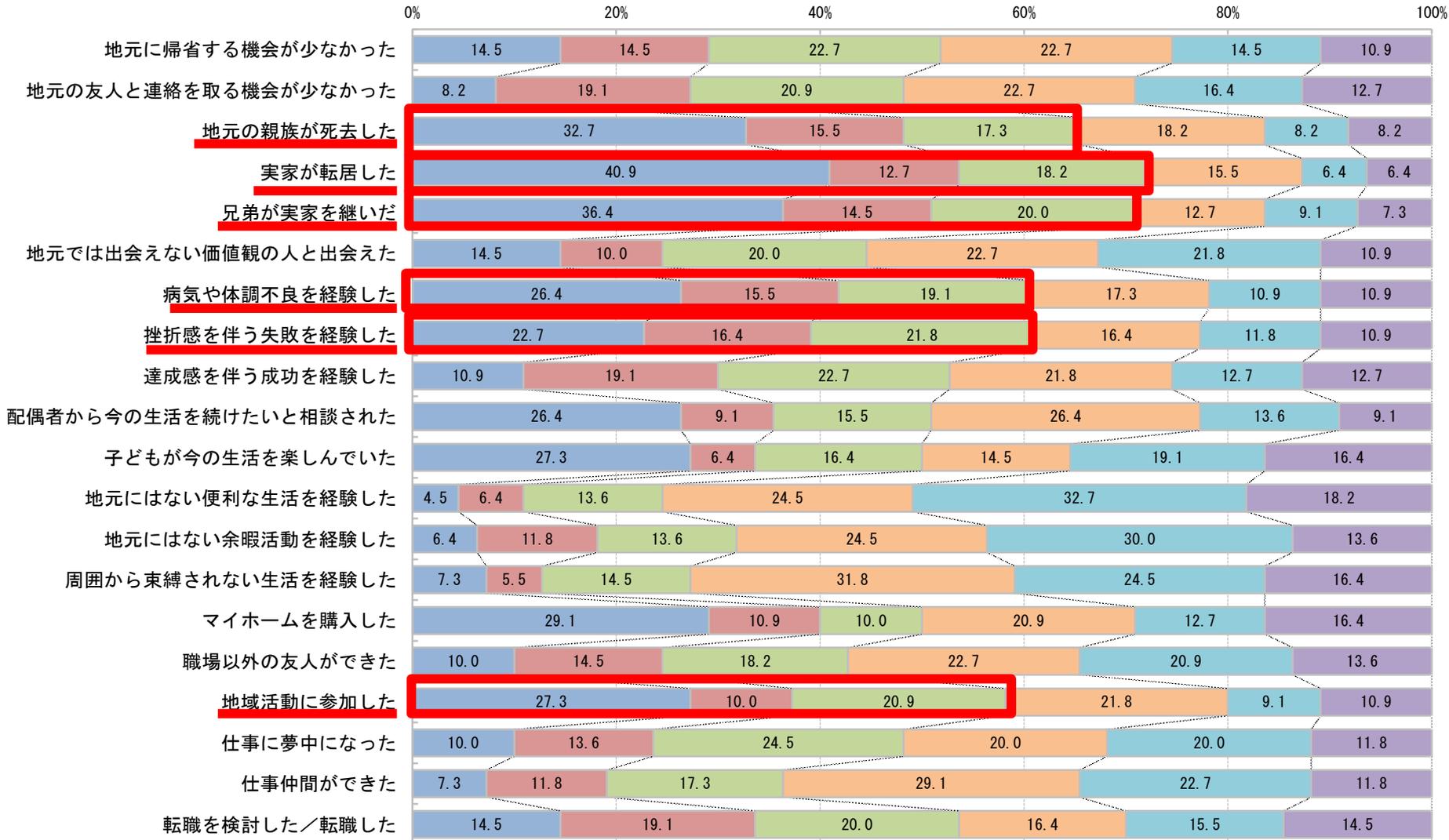


# 「Uターン意識」に影響した経験

高卒前・Uターン意識有り×現在・Uターン意識無し

[Q5]現在の「Uターン意識」に対して、高校卒業後から現在までの、以下の経験がどの程度影響しましたか？

■まったく当てはまらない ■あまり当てはまらない ■どちらかという当てはまらない ■どちらかという当てはまる ■まあ当てはまる ■大いに当てはまる



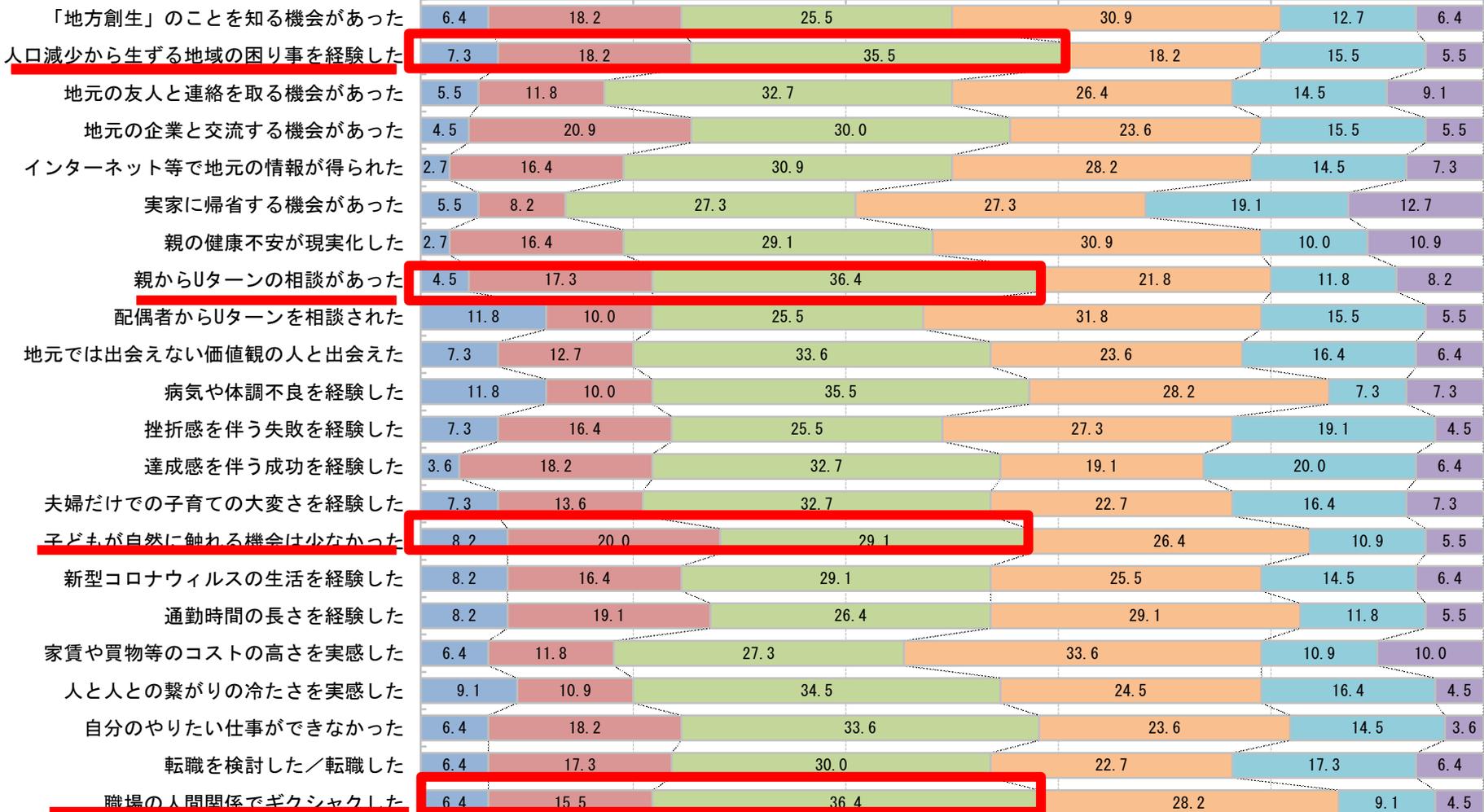
# 「Uターン意識」に影響した経験

高卒前・Uターン意識無し×現在・Uターン意識有り

[Q3]現在の「Uターン意識」に対して、高校卒業後から現在までの、以下の経験がどの程度影響しましたか？

■まったく当てはまらない ■あまり当てはまらない ■どちらかという当てはまらない ■どちらかという当てはまる ■まあ当てはまる ■大いに当てはまる

0% 20% 40% 60% 80% 100%



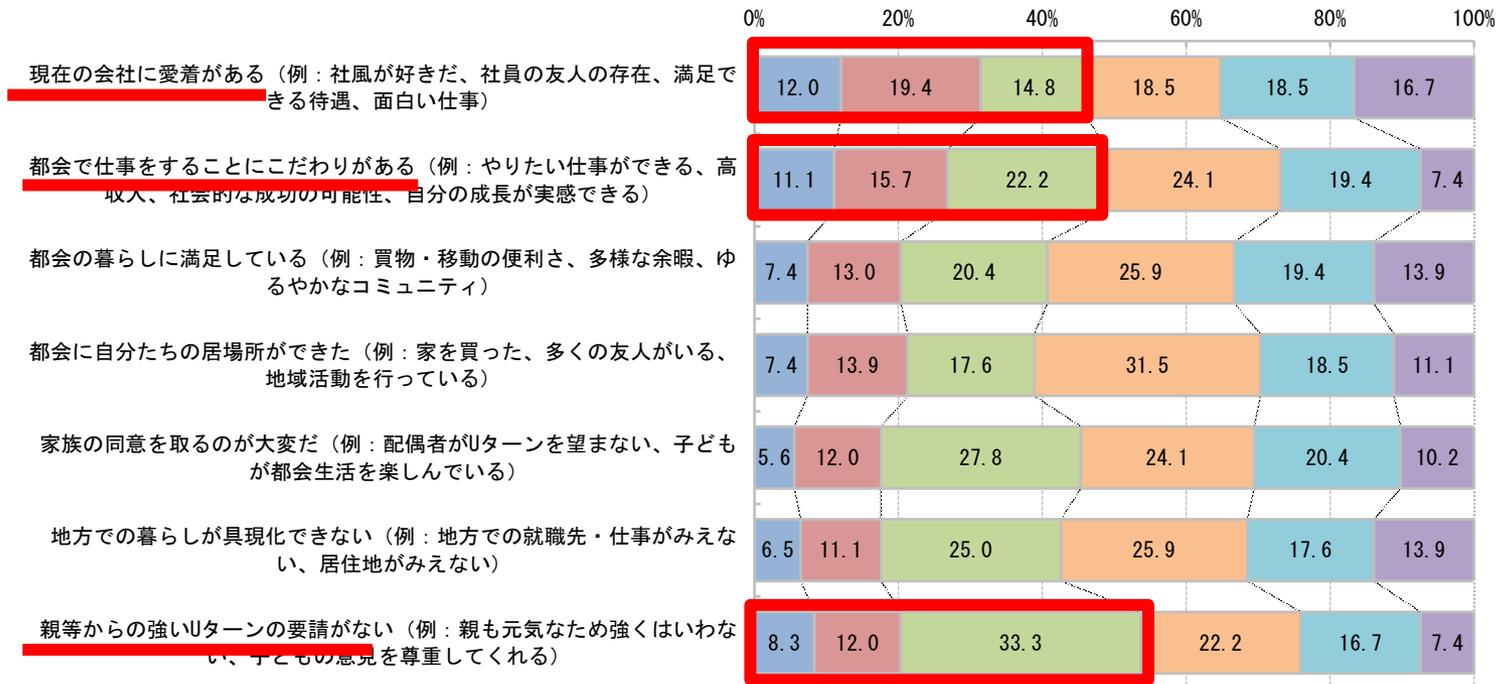


# Uターンを決断できない要因

高卒前・Uターン意識有り×現在・Uターン意識有り

[Q7] 現在も「Uターン意識」がありながら、Uターンを決断できないことについて、以下の要因がどの程度影響していますか？

- まったく当てはまらない
- あまり当てはまらない
- どちらかという当てはまらない
- どちらかという当てはまる
- まあ当てはまる
- 大いに当てはまる



# Uターンの決断に影響する要因

高卒前・Uターン意識有り×現在・Uターン意識有り

[Q9] 今後、あなたがUターンを決断する要因として、以下の出来事がどの程度影響していますか？

- まったく当てはまらない
- あまり当てはまらない
- どちらかという当てはまらない
- どちらかという当てはまる
- まあ当てはまる
- 大いに当てはまる



# 結果（因子分析）と考察

高卒前・Uターン意識**有り**×現在・Uターン意識**無し**

# 現在のUターン意識消失の要因 (全体)

全体 (n=110)

変数	因子1	因子2	因子3	因子4	因子名
11子どもが今の生活を楽しんでいた	0.807	0.153	0.077	0.054	都会の生活基盤浸透
15マイホームを購入した	0.795	0.126	0.096	0.061	
17地域活動に参加した	0.670	0.231	0.409	0.123	
10配偶者から今の生活を続けたいと相談された	0.663	0.207	0.311	0.086	
05兄弟が実家を継いだ	0.632	0.069	0.368	0.212	
03地元の親族が死去した	0.542	0.007	0.415	0.362	
12地元にはない便利な生活を経験した	0.094	0.818	-0.066	0.139	魅力的な 暮らしの享受
14周囲から束縛されない生活を経験した	0.018	0.767	0.164	0.154	
13地元にはない余暇活動を経験した	0.127	0.765	0.007	0.333	
19仕事仲間ができた	0.222	0.616	0.363	-0.097	
18仕事に夢中になった	0.394	0.576	0.346	-0.019	
16職場以外の友人ができた	0.287	0.550	0.314	0.229	
08挫折感を伴う失敗を経験した	0.221	0.082	0.877	0.153	多様な経験
07病気や体調不良を経験した	0.238	0.138	0.744	0.127	
09達成感を伴う成功を経験した	0.334	0.302	0.581	0.097	
02地元の友人と連絡を取る機会が少なかった	0.081	0.241	0.107	0.764	地元との繋がり
01地元に戻省する機会が少なかった	0.168	0.144	0.147	0.705	
固有値	3.430	3.190	2.660	1.551	
寄与率	20.178%	18.764%	15.648%	9.124%	
累積寄与率	20.178%	38.941%	54.590%	63.714%	

注1) 因子抽出法=主因子法, 回転法=Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

注2) 固有値が1以上の因子数とした。

注3) 次の変数は因子負荷量が0.50未満のために削除した。

04実家が転居した

06地元では出会えない価値観の人と出会えた

20転職を検討した/転職した

# 現在のUターン意識消失の要因（男性）

男性（n=57）

変数	因子1	因子2	因子3	因子4	因子名
03地元の親族が死去した	0.782	0.204	-0.010	0.230	地元解放＋ 都会の生活基盤浸透
15マイホームを購入した	0.759	0.015	0.274	-0.047	
05兄弟が実家を継いだ	0.743	0.298	0.004	0.154	
04実家が転居した	0.740	0.217	-0.137	0.332	
17地域活動に参加した	0.693	0.386	0.117	-0.031	
10配偶者から今の生活を続けたいと相談された	0.693	0.264	0.195	-0.016	
11子どもが今の生活を楽しんでいた	0.676	0.169	0.124	0.115	
09達成感を伴う成功を経験した	0.328	0.779	0.221	0.002	仕事の経験
08挫折感を伴う失敗を経験した	0.411	0.759	0.059	0.070	
19仕事仲間ができた	0.173	0.677	0.338	-0.051	
18仕事に夢中になった	0.193	0.641	0.365	-0.017	
07病気や体調不良を経験した	0.374	0.625	0.079	0.112	
06地元では出会えない価値観の人と出会えた	0.073	0.587	0.212	0.311	
13地元にはない余暇活動を経験した	0.179	0.069	0.799	0.261	魅力的な 暮らしの享受
14周囲から束縛されない生活を経験した	0.032	0.384	0.721	0.047	
12地元にはない便利な生活を経験した	-0.017	0.329	0.707	0.251	
16職場以外の友人ができた	0.331	0.382	0.529	0.237	
02地元の友人と連絡を取る機会が少なかった	0.071	0.056	0.208	0.796	地元との繋がり
01地元へ帰省する機会が少なかった	0.242	0.048	0.229	0.752	
固有値	4.400	3.625	2.545	1.709	
寄与率	23.156%	19.080%	13.393%	8.993%	
累積寄与率	23.156%	42.236%	55.628%	64.621%	

注1) 因子抽出法＝主因子法，回転法＝Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

注2) 固有値が1以上の因子数とした。

注3) 次の変数は因子負荷量が0.50未満のために削除した。

20転職を検討した／転職した

# 現在のUターン意識消失の要因（女性）

女性（n=53）

変数	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子名
11子どもが今の生活を楽しんでいた	0.923	0.063	0.035	0.055	0.088	都会の生活基盤浸透
15マイホームを購入した	0.822	0.028	0.117	0.114	0.115	
10配偶者から今の生活を続けたいと相談された	0.654	0.185	0.299	0.124	0.195	
17地域活動に参加した	0.633	0.338	0.399	0.308	-0.005	
18仕事に夢中になった	0.572	0.480	0.141	0.117	0.293	
13地元にはない余暇活動を経験した	0.087	0.918	0.040	0.224	0.011	魅力的な暮らしの享受
14周困から束縛されない生活を経験した	0.014	0.813	0.085	0.141	0.082	
12地元にはない便利な生活を経験した	0.150	0.724	-0.187	-0.009	0.208	
16職場以外の友人ができた	0.280	0.539	0.378	0.113	0.067	
08挫折感を伴う失敗を経験した	0.151	0.024	0.889	0.302	0.057	ネガティブな経験
07病気や体調不良を経験した	0.206	0.024	0.809	0.204	0.205	
02地元の友人と連絡を取る機会が少なかった	0.043	0.299	0.071	0.828	0.180	地元との繋がり
04実家が転居した	0.221	-0.013	0.413	0.610	-0.245	
01地元に戻省する機会が少なかった	0.085	0.082	0.199	0.609	0.166	
03地元の親族が死去した	0.387	0.078	0.397	0.519	-0.055	
19仕事仲間ができた	0.215	0.549	0.206	-0.038	0.663	ステップアップの機会
20転職を検討した／転職した	0.324	0.137	0.106	0.297	0.581	
固有値	3.215	3.124	2.342	2.144	1.145	
寄与率	18.913%	18.379%	13.774%	12.610%	6.738%	
累積寄与率	18.913%	37.291%	51.066%	63.676%	70.414%	

注1) 因子抽出法＝主因子法，回転法＝Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

注2) 固有値が1以上の因子数とした。

注3) 次の変数は因子負荷量が0.50未満のために削除した。

05兄弟が実家を継いだ

06地元では出会えない価値観の人と出会えた

09達成感を伴う成功を経験した



# 現在のUターン意識消失の要因（まとめ）

表4□現在のUターン意識消失要因の因子の比較  
（全体・男性・女性別）

男性	全体	女性
地元解放+都会 の生活基盤浸透 (23.156%)	都会の生活基盤 浸透 (20.178%)	都会の生活基盤 浸透 (18.913%)
仕事の経験 (19.080%)	魅力的な 暮らしの享受 (18.764%)	魅力的な 暮らしの享受 (18.379%)
魅力的な 暮らしの享受 (13.393%)	多様な経験 (15.648%)	ネガティブな経 験 (13.774%)
地元との繋がり (8.993%)	地元との繋がり (9.124%)	地元との繋がり (12.610%)
-	-	ステップアップ の機会 (6.738%)

寄与率



# 考察〈全体〉

## ■ 「地元との繋がり」の重要性

- ・大都市に転出した若者に対して継続的に繋がるの機会を持つことが必要
- ・「Uターン意識消失要因」の寄与率は四番目で、男性の寄与率は約9%、女性の寄与率は約13%。この数値の意味は、男性のUターン意識消失の約9%、女性のUターン意識消失の約13%は「地元との繋がり」がとれなかったことが関係しているという意味。
- ・「地元情報の発信」や「都会開催イベントの案内」、「ふるさと会員制度」など、同種の施策や事業は多くの自治体で大なり小なり取り組まれているものと考えられるが、実際のところ、その有効性が実感できない中で、また、対外的に十分な説明ができないもどかしさの中で、継続されているのではないかと推察。
- ・今回の研究成果を参考としながら、「1割程度の意識消失の要因をつぶす」ために「地元との繋がり」に寄与する施策・事業を、実感をもって継続あるいは改良されることを期待。
- ・一方、リソースが限られる中で行政運営を強いられる現実を考えるならば、一定水準の社会増を獲得している自治体においては、1割程度の意識変容にしか影響しないことや費用便益比の観点から、撤退するという判断がなされることもあり得るとも考えられる。



# ～参考資料～

塩見一三男（2023）：地域との繋がりが若者のUターンに与える影響に関する研究－地方出身・東京圏進学者を対象としたUターン実施に関するケーススタディー：日本地域政策研究，30 巻， p. 60-68

[日本地域政策研究30 \(jst.go.jp\)](http://jst.go.jp)

## ■ 高校卒業後のUターン情報提供や地元知人と出会う機会づくり等はUターン意識変容に影響し、行動変容にも結びつく可能性あり

- ・地方出身で東京圏への大学等に進学して卒業後も東京圏で働き続けている者に対して、高校卒業後も継続的に地域との繋がりの機会を持つことは、「地元へのUターンを検討する」という意識変容に大きく影響するものと推察される。また「実際にUターンする」という行動変容にも影響する可能性が考えられる。
- ・具体的な取組の視点としては、調査項目e⑤⑥にあるUターンに係る情報提供や就職の機会づくりや、同①②の地元友人とのコンタクトの機会づくり、同④の地元のお祭りや伝統行事等への参画の機会づくり、そして同③の結婚の機会づくり等に可能性があるものと考えられる。

# ～参考資料～

調査項目	「地域との繋がり」の具体的な状態」の設問	地域との繋がり強度			差の検定結果（有意確率）				
		全体 (n=218)	Uターンの状況			全群の中で の差の有無	各群間の差		
			Uターン 実行 (n=108)	Uターン 検討 (n=72)	Uターン 非検討 (n=35)		Uターン実行-Uターン 非検討	Uターン検討-Uターン 非検討	Uターン実行-Uターン 検討
人々での地域の繋がりの業	①両親や兄弟等の家族との仲はとて良かった	3.83	3.83	3.92	3.66	0.423			
	省略								
	⑫アルバイトをしたことが、地域のことを知る上で良い経験だった	2.75	2.60	3.06	2.63	0.043 *	1.000	0.045 *	0.306 *
	単純平均	3.09	2.98	3.36	2.84				
を学ぶ地域の小学校	①教師が講師となって、地域のことを講義する授業は、良い経験だった	3.01	2.85	3.46	2.57	0.000 **	0.697	0.000 **	0.000 **
	省略								
	⑮地元の地域課題を知る授業は、良い経験だった	3.20	3.11	3.51	2.83	0.004 **	1.000	0.012 *	0.018 *
	単純平均	3.15	3.07	3.46	2.73				
を学ぶ地域の中学校	①教師が講師となって、地域のことを講義する授業は、良い経験だった	3.06	2.93	3.50	2.57	0.000 **	0.500	0.000 **	0.001 **
	省略								
	⑮地元の地域課題を知る授業は、良い経験だった	3.08	2.96	3.40	2.74	0.006 **	1.000	0.015 *	0.023 *
	単純平均	3.07	2.96	3.43	2.69				
地域を学ぶ高校	①教師が講師となって、地域のことを講義する授業は、良い経験だった	2.94	2.81	3.28	2.71	0.014 *	1.000	0.062	0.027 *
	省略								
	⑮地元の地域課題を知る授業は、良い経験だった	3.02	2.99	3.35	2.46	0.001 **	0.038 *	0.001 **	0.192
	単純平均	2.97	2.88	3.30	2.58				
地域の繋がりの卒業後	①地域の友人等とは頻りに連絡をとっていた	3.32	3.23	3.71	2.77	0.001 **	0.231	0.001 **	0.021 *
	②帰省時には、友人等と会う機会をとっていた	3.48	3.48	3.81	2.80	0.001 **	0.024 *	0.001 **	0.308
	③将来、結婚しても良いと思う相手がいた	2.72	2.69	3.13	2.00	0.000 **	0.025 *	0.000 **	0.077
	④地域のお祭りや伝統行事には、よく参加していた	2.86	2.69	3.35	2.29	0.000 **	0.315	0.000 **	0.001 **
	⑤地域の市町村によるUターンに係る情報提供は、とても役に立った	2.82	2.75	3.24	2.20	0.000 **	0.081	0.000 **	0.025 *
	⑥地域の市町村によるUターンに係る就職の機会は、とても役に立った	2.83	2.81	3.18	2.23	0.000 **	0.060	0.000 **	0.065
	単純平均	3.01	2.94	3.35	2.52				

注1) アンケート票において、地域の人の例示として「企業、行政、NPO、自治会等」を表記していた。

注2) 次の5段階の順序データに1～5点を配点して平均値を求めた。

とても当てはまる(5点)、まあ当てはまる(4点)、どちらとも言えない(3点)、あまり当てはまらない(2点)、全く当てはまらない(1点)

注3) 「全体」、「Uターンの状況」のデータは「3.00」以上の箇所について表示した。

注4) 全群 Kruskal-Wallis検定により、漸近的な有意確率を表示している。 \* : 5%有意 \*\* : 1%有意

注5) 各群間 各群間の分布が同じであるという帰無仮説をDunn検定している。漸近的な有意確率(両側検定)を表示している。

Bonferroni訂正により、有意確率の値が調整されている。 \* : 5%有意 \*\* : 1%有意



# 考察〈男性〉

## ■ 起業・コミュニティビジネスの環境

- ・男性の「仕事の経験」や「魅力的な暮らしの享受」という因子に対して、大都市と同じような“仕事”や“魅力的な暮らし”を地元で準備することは相当に難しい。
- ・ただし、“仕事”でいうなら、大都市と同じ企業や待遇、業種などを地元で準備することは難しいものの、大都市では決して経験できない「地方ならではの」、「やりがいを感じられる」仕事の機会を用意するという方向性であれば、反応する者は少数になると考えられるが、若者を惹きつける可能性ある。
- ・「地方ならではの」、「やりがい」のある仕事の一つの方向性として、自分自身で仕事をおこすこと（起業）というアプローチの視点や、社会課題・地域課題の解決というテーマの視点から考えることができる
- ・例えば、Uターンを検討中の大都市に住む若者に対して、地域課題解決ビジネスを研究する「とやま呉西圏域共創ビジネス研究所」を経験してもらうことも、一つの方向性かも知れない。

[とやま呉西圏域共創ビジネス研究所\\_第5期事業報告\\_単ページ  
\(toyamagosei.jp\)](http://toyamagosei.jp)



# 考察〈男性〉

## ■ 実家のコトを考える機会

- ・「地元解放＋都会の生活基盤浸透」という因子の“地元解放”の部分に対して、意識変容を抑止する地方からのアクションの可能性が考えられる。
- ・すなわち、“親族が死去した”や“兄弟が実家を継いだ”などの、コトが起こってしまったからでは手遅れとなるのだが、そのコトが起こる前段階から、“実家のことをどうするのか”を考えてもらう機会を設けるもの。
- ・「地元との繋がり」の取組とからめて、ライフプランづくりや相続に係る法務などの相談会の機会などを設けることが考えられる。



# 考察〈女性〉

## ■ ジェンダーギャップ

- 男性の「魅力的な暮らしの享受」の因子に対しては、意識変容を抑止する地方からのアクションは考えられなかったが、女性についてはそうではない。
- この因子に含まれる“地元にはない余暇”や“地元にはない便利さ”といった都会ならではの暮らしの要素に対して地方からアクションをすることは相当難しいといえるが、着目すべきは“周囲から束縛されない生活”にあると考えている。
- 極端な言い方をすれば、この因子には、“都会ならではの暮らし”という要素以外にも、男性中心社会の中で女性の役割を強いられることから解放される喜びを感じる層も含まれるものと考えられる。
- この層に対して、地域が変わり、そのことを伝えるのである。
- 例えば、兵庫県豊岡市は、女性のUターン促進に向けたジェンダーギャップの解消の取組を市として展開している。豊岡市の場合は市長が交代したため、今後の展開が見えないところであるが、このような施策展開の方向性が考えられる。



# 考察〈女性〉

## ■ 女性の自分探しの機会

- ・「ネガティブな経験」の解釈は難しい。一見すると、ネガティブな経験から被ったダメージを癒すために、ふるさとや家族の存在があり、ネガティブな経験はむしろUターン意識を醸成する機会ではないかと考えてしまう。
- ・しかし、因子の中にある“挫折感を伴う経験”が、都会由来なのか地元由来なのかが判断できないところгомどかしい。
- ・例えば、都会由来の挫折感を経験したり、病気など経験した女性に対して、地元側が受けいれてくれるような機会を設けることを、この因子によるUターン意識消失を回避する方向性が考えられる。

[せんだんのHILL | めぐるとやま \(megurutoyama.jp\)](http://seندانのHILL | めぐるとやま (megurutoyama.jp))



# 考察〈全体〉

## ■ 呉西圏域の移住担当者の勉強会

- 因子分析とは、客観的なデータに基づいて潜在的な因子を抽出し、その因子の意味づけをおこない、解きたい事象（＝Uターン意識消失）の構造を探る統計解析手法である。
- 前段までで述べてきた解釈は、私個人のものであり、一定の解釈はできたと認識しているが、それが全てでは無く、異なる解釈もあろうかとも考えている。特に行政の移住政策に従事されている方であれば、様々な移住者に接する機会も多く、その具体個別のシーンに基づいて、今回の潜在的な因子に別の解釈をいただける可能性もあるものと考えている。
- 公共政策を考える場合、極端な言い方をすれば、潜在的な因子の真値を確定することにはさほど意味は無く、どのような因子の要素が隠されているのかを探索する方が、新たな施策や事業を検討する際に有用な情報が得られるのではないだろうか。
- 例えば、今回の因子分析結果を題材として、呉西圏域の移住政策担当者が集合して、男女別のUターン意識消失の因子の解釈について話し合い、それぞれの気づきを共有し、各自治体の施策にどのように反映させることができるかを考える場として使える可能性がある。

# ～参考資料～

## 未来共創型・地域づくり勉強会の主旨

【目的】 多様性や持続可能性の観点も踏まえた未来志向での地方創生の実現

### 教育の場 (講義・演習等)

- 教員からの一方的な知識伝達だけではなく、普段は立場の異なる受講者やオブザーバーとの“共創”の場
- 共通の**テーマA**と受講者任意の(解決等したい)テーマBとの掛け合わせで解決策を検討

**受講者** 自治体の職員等 (※)

※「等」は行政とともに公的業務等取組を行っているNPO・社会福祉法人・まちづくり団体等の職員を想定



**オブザーバー**

受講者以外の自治体, 地域金融機関, 政府系金融機関, 民間事業者, NPO・社会福祉法人・まちづくり団体など

**運営主体 (国・大学・DBJ)**

授業全体の企画・運営

### 期待効果

- 受講者が現実に向
- 政策課題の解決策の集中的な検討
- 政策形成能力ステップアップ
- 立場の異なる仲間づくり

## カリキュラム

回	月日	時間	テーマ	形式	講師 (候補)
1	10月 21日 (金)	15～ 17	○講義～地方の出生数減少のメカニズムと反転施策などを未来志向で考えてみる ○グループワーク	オンライ ン	内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局 女性活躍・少子化G 参事官補佐 岡 勇輝 氏
2	11月 10日 (木)	"	○講義～出生数向上 (女性定着・活躍推進)の地域づくりの事例について考えてみる ○グループワーク	"	長野県塩尻市 産業振興事業部 先端産業振興室 室長 太田 幸一 氏
3	11月 30日 (水)	"	○講義～若い女性のUターン・定着動向と地方の仕事 (多様な働き方が可能な風土・職場の創出などを考えてみる) ○グループワーク	"	(株)マイナビ 富山支社 支社長 松田 浩樹 氏 他
4	1月 (仮)	2時間	○講義～女性が暮らしやすい地域・まちづくりについて考えてみよう! ○グループワーク	"	東京都豊島区 兵庫県豊岡市
5	2月 (仮)	2時間	演習 ※受講者が事前に作成してきたアウトプット (案) を受講者, オブザーバー, 運営主体でブラッシュアップする	"	-
6	4月 (仮)	2時間	"	"	<b>施策づくり</b>
7	5月 (仮)	-	成果報告会	対面 or オン ライ ン	-

施策のテーマ探し

施策づくり

※1～4回は、講義60分、意見交換60分の2時間を想定 5～6回の進捗状況によっては個別演習を設ける場合有り  
2023年度は一回は一般の参加者も受け入れる

Copyright (c) Isao SHIOMI

# (参考) 結果 (因子分析)

高卒前・Uターン意識無し×現在・Uターン意識有り

# 現在のUターン意識発生の要因 (全体)

全体 (n=110)

変数	因子1	因子2	因子3	因子4	因子名
09配偶者からUターンを相談された	0.707	0.269	0.375	0.119	人間関係・
21転職を検討した/転職した	0.651	0.222	0.054	0.266	
22職場の人間関係でギクシャクした	0.633	0.213	0.275	0.292	
19人と人との繋がりを実感した	0.628	0.206	0.304	0.038	
10地元では出会えない価値観の人と出会えた	0.618	0.265	0.255	0.381	
08親からUターンの相談があった	0.563	0.435	0.123	0.172	
17通勤時間の長さを経験した	0.556	0.442	0.373	-0.056	
12挫折感を伴う失敗を経験した	0.527	-0.022	0.524	0.093	
20自分のやりたい仕事ができなかった	0.509	0.239	0.173	0.273	
07親の健康不安が現実化した	0.250	0.711	-0.092	0.127	地元の繋がり
03地元の友人と連絡を取る機会があった	0.163	0.575	0.238	0.155	
05インターネット等で地元の情報が得られた	0.364	0.554	0.111	0.101	
16新型コロナウイルスの生活を経験した	0.342	0.553	0.444	-0.041	
18家賃や買物等のコストの高さを実感した	0.356	0.534	0.222	0.242	
06実家に帰省する機会があった	0.010	0.515	0.147	0.258	
15子どもが自然に触れる機会は少なかった	0.212	0.152	0.684	0.201	子育て
14夫婦だけでの子育ての大変さを経験した	0.195	0.173	0.608	0.271	
11病気や体調不良を経験した	0.384	0.216	0.504	0.365	
02人口減少から生ずる地域の困り事を経験した	0.263	0.286	0.167	0.610	地域貢献
13達成感を伴う成功を経験した	0.211	0.174	0.382	0.600	
固有値	4.074	2.933	2.446	1.588	
寄与率	20.369%	14.663%	12.232%	7.942%	
累積寄与率	20.369%	35.032%	47.264%	55.206%	

注1) 因子抽出法: 主因子法, 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

注2) 固有値が1以上の因子数とした。

注3) 次の変数は因子負荷量が0.50未満のために削除した。

01「地方創生」のことを知る機会があった

04地元の企業と交流する機会があった

# EOF

塩見一三男 (Isao SHIOMI)  
富山大学 地域連携推進機構 地域連携戦略室  
shiom@ctg.u-toyama.ac.jp